



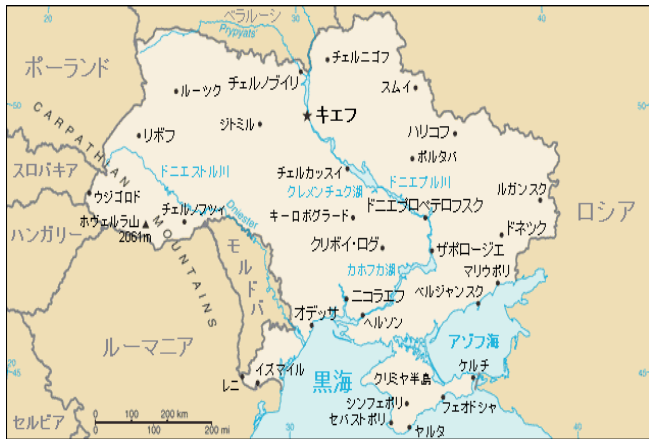
ウクライナ問題を考える(その2)



玉上 佳彦

現在ウクライナで連日起きているロシア軍による破壊と殺戮は、とても 21 世紀のこととは信じられない。

私は、本章では、2ヶ月以上に渡って繰り返されている具体的な戦況を述べることは控えたい。多くの情報を正確に判断して、真実を見極めていただきたいと考えている。



★本章では、プーチンの歴史観や思想的背景を考察し、ロシアのネオ・ユーラシア主義の本質からウクライナ問題について考えてみたい。

プーチンはウクライナ政権を**ネオナチ**と断定しているが、かつてのナチによる悲劇を忘れることのできない怨念のようなものが現在も残っているのではないかと思う。従って、プーチンはウクライナの非ナチ化をめざして愛国心を鼓舞するプロパガンダを展開しているのであろう。

ロシアの思想的な背景として「ネオ・ユーラシア主義」があるといわれている。極右の地政学者“アレクサンドル・ドゥーギン”によるネオ・ユーラシア主義は、ヨーロッパからアジアにまたがる広大なユーラシアの地域は、ロシアの勢力圏だという主張であり、ここを統一的に支配することがロシア民族にとって必要なのだという考え方といわれている。

従って、ウクライナを含む旧ソ連邦の国々は、西側からの NATO 勢力に侵されてはならず、ウクライナの隣国モルドバやポーランド、ジョージア、フィンランドなど周辺諸国への侵攻も心配される。

「ロシア正教会」のトップのキリルー世は、「ロシア軍はロシアの人々のために平和を守っている」などと発言し、プーチンのウクライナ侵攻を支持し、「ロシアとウクライ

ナは同じ信仰と聖人、希望と祈りを分かち合う一つの民族だ」、「(外国勢力が)私たちの関係を引き裂こうとしている」、「悲劇的な紛争は、第一にロシアを弱体化させるための(外国の)地政学上の戦略になっている」。

プーチンの侵略を支持するキリルー世は、「ロシア正教会はロシア政府の一機関」と言われるほどにプーチンに寄り添っている。プーチンは、ゼレンスキー大統領を欧米の支援を受ける「民族主義者」「ネオナチ」と呼び、侵略を正当化し、戦争は「ウクライナ人の罪への報い」であるとしている。

ウクライナ国民の7割は、東方正教会の信者とされており、今回のロシアのウクライナ侵攻を巡っては、ローマ教皇や、ウクライナ東方正教会のトップが相次ぎ戦争を非難し、停戦を訴えている。従って、今回のウクライナ侵攻はある種の**宗教戦争**の意味合いが見られる。

★全く別の観点から見ると、アメリカを始めとする NATO 諸国などの非友好国はウクライナ支援という名のもとに大量の武器を供与している。

特にアメリカはウクライナ支援のために高額の軍事支援をしているが、それは自国の軍事産業を政府の金で支えていることを見逃してはならない。

アメリカの軍需産業は、自国に影響が及ばない地域で戦争が続いてくれることが望ましいのである。

★ウクライナでの戦争の長期化が予想されるが、今後の世界経済への悪影響は多大であり、エネルギー源の混乱だけではなく、小麦などの食糧危機も極めて深刻な事態が予想される。

★日本の問題としては、ウクライナの問題に悪乗りして自民党の「核共有論」、「敵基地攻撃能力(反撃能力)」、「軍事費を GDP の2%に増額」などの主張が出ていることは、極めて危険な方針転換になるのではないだろうか。注視していく必要がある。

★ウクライナからの避難民を積極的に受け入れることは、友好国として当然であるが、これまでも問題になっていた日本政府の難民政策を見直す時期に来ていると思う。シリア、クルド、ミャンマーなどからの難民受け入れを拒否してきた日本政府が今後どうすべきか熟考すべき時期だろう。